

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

中国が政治利用するチンギス・ハーン：
「中華民族の英雄」と資源化するモンゴルの歴史と
文化

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 楊, 海英 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00008636

中国が政治利用するチンギス・ハーン ——「中華民族の英雄」と資源化するモンゴルの歴史と文化

楊海英（大野旭）

静岡大学

1 世界史における再認識のチンギス・ハーン

チンギス・ハーンといえば、今や日本の読書界では「世界史の創造者」とのイメージがほぼ定着している。それは、岡田英弘の『世界史の誕生』（1992）や杉山正明の『大モンゴルの世界』（1992）と『世界の歴史——大モンゴルの時代』（2008）などのような歴史学者の開拓的な著作が従来の偏見と差別的な遊牧民観、モンゴル観を変えた結果である。日本の歴史学者はソ連崩壊後に漢籍中心から飛躍してペルシア語やアラビア語、それにモンゴル語とテュルク系諸言語などからなる史料群を広く渉猟するようになり、グローバルな視点で歴史の真相に接近できたからである。

欧米においても、同じである。チンギス・ハーン¹⁾は「殺戮者」や「侵略者」から「平和国家の先駆け」へと変身した。アメリカの文化人類学者ジャック・ウェザーフォードはチンギス・ハーンを描く時に戦略的な方法を取った。彼は自著『ボックス・モンゴリカーチンギス・ハンがつくった新世界』（2006）（*Genghis Khan and the Making of the Modern World* 2004）をまず、モンゴル国で出版して、チンギス・ハーンに関する知識に飢えていたモンゴル人の要望に応えた（写真1）。現地での好評を盾にアメリカで公開されると、たちまち『ニューヨーク・タイムズ』のベストセラーにランクインした。ウェザーフォードは以下のようにチンギス・ハーンを評価する〔ウェザーフォード 2006: 18, 20〕。

チンギス・ハーンの帝国は彼を取り巻く多くの文明を結びつけ、融合させ、新しい世界秩序をもたらした。1262年に彼が生まれたころの旧世界は、それぞれすぐ隣の文明しか知らないに等しいローカルな文明群から成っていた。中国でヨーロッパのことを聞いた人はいなかったし、ヨーロッパで中国のことを聞いた人もおらず、また記録に残るかぎりそのふたつのあいだを旅した人もいなかった。……彼は人類を一変させたのだ。チンギス・ハーンの軍勢は、倒れた主君を隠密に埋葬するため、ふるさとのモンゴル地方へ運ぶ。

ウェザーフォードはモンゴル語の年代記やその他の史料をふんだんに引用し、モンゴル人が伝えるところのチンギス・ハーン関連の遺跡をまんべんなく訪ね歩いた。そして、近代に入ってから、西洋のキリスト教徒の植民主義者もロシア人共産主義者も自らを「解



写真1 モンゴル国の首都ウランバートルの郊外に立つ巨大なチンギス・ハーン像。ソ連はモンゴル人がチンギス・ハーンについて研究し、その歴史を伝承することを禁じてきたので、国民は祖先の偉業を忘却していた(2015年8月、筆者撮影)。

放者」に仕立て上げる為に、チンギス・ハーンを「人類史のどん底に引きずりおろし」て、虐殺者や侵略者に書き換えた」と指摘する [ウェザーフォード 2006: 401]。

イギリスの歴史家・旅行作家のジョン・マンは二つのセンセーショナルな記事に注目した。1995年12月に『ワシントン・ポスト』紙は、チンギス・ハーンを「過去千年で最も重要な人物」に選んだことがひとつだ。もうひとつは、権威あるオックスフォード大学などの研究者チームが発表した成果だ。チンギス・ハーンには「今日、千六百万人もの子孫がいる」。「十二世紀にモンゴルリアに住んでいたひとりの人物が自分の遺伝物質をユーラシア大陸の半分にばらまいた結果、現在生きている全男性の二百人にひとりか、その遺伝物質をもっている」[ジョン 2006: 12-13]。その男は、ほかでもないチンギス・ハーンである。ジョンもまたモンゴルリア全域を旅し、各地各界のモンゴル人にインタビューをし、草原に暮らす遊牧民が如何に「英雄なる祖先の栄光」を誇りに思っているかを活写し、欧米が今日までに意図的に歪曲してきた「チンギス・ハーンの本来的歴史」の復原に力を入れた。当然、「ステップの視野」に立つ彼の著作もまたモンゴルでは好意的に捉えられている。

ロシアはどうだろう。ヨーロッパなのか、アジアなのか、両者の間を彷徨いつづけてきたロシアの知識人たちは「タタールの軛とユーラシア主義の間」を動揺してきた。ユーラシア主義者がチンギス・ハーンの功績を称えるのに対し、別の親ヨーロッパ主義者たちは「タタールの軛」が「偉大なロシアの停滞」をもたらしたと主張する [浜 2010]。

岡田英弘や杉山正明の著作の一部は近年では中国語にも翻訳され、さまざまな反響を引き起こし、静かな「歴史解釈の動き」が中国にも生じつつある。それでも、今日までに中国人が書いたチンギス・ハーン関連の著作には良書はほとんどない。チンギス・ハ

ーンに関する良書が少ない事実は決して関心がないことを意味しない。私が把握しているだけでも朱耀庭著『成吉思汗伝』[1991]や李振文・那楚格著『千年偉人成吉思汗』[2002]、李振文著『成吉思汗史論集』[2003]などがあるが、新しい見解は皆無に近い。それは、中国人の書き手は漢文資料しか使わないことと、主として中華中心主義の視点でチンギス・ハーンを「中華の英雄」として語ろうとするからであろう。多言語資料を同時に駆使しない限り、こうした研究状況は変わらないだろう。

中国人はチンギス・ハーンに対して、強烈な忤怩たる本音を抱いてきた。以下は文豪・魯迅 [1934: 111-112] が中国人のチンギス・ハーン観、あるいはモンゴル観について喝破した文である²⁾。

我々のチンギス・ハーンがヨーロッパを征服した頃は、我々の最も胸を張れる時代だった、と聞いていた。二五歳になって、その我々の最も胸を張れる時代というのは、実際はモンゴル人に征服されて、我々が奴隷とされた時代だったと知った。今年の八月になって、少し昔のことを調べようとして三冊のモンゴル史をめぐってみた。モンゴル人が中国を征服する前にすでにロシアやハンガリー、それにオーストリアを征服していたことが分かった。あの頃のチンギス・ハーンは我々のハーンではなかったし、奴隷になった資格もロシアの方が我々より早かった。だから、ロシアの方が、「我々のチンギス・ハーンが中国を征服していた頃が、我々の最も胸を張れる時代だった」と自慢すべきだろう。

このように、チンギス・ハーンはいつしか中国人にとっても、「我々の」ものにされて、「誘拐」されている [Bulag 2010: 31-64]。魯迅の文は1934年に書かれたもので、当時の中国人の心情を風刺したものであるが、現在でも、「チンギス・ハーンはヨーロッパまで遠征した唯一の中国人」だ、と多くの中国人は妄想している (写真2)。中国は近代に入ってから西洋列強に侵略されて没落したが、それ以前はむしろ逆で、「中国人」が西洋を支配下に置いていた、と魯迅がいうところの「阿Q精神」で以て自己満足しているようである。

「チンギス・ハーンは誰の英雄だろうか」、という問題はモンゴル人だけでなく、中国やロシア、ひいてはユーラシアの遊牧民と欧米をも巻きこんだ政治的な課題として表象されてきた [Shimamura 2012; 島村 2017: 36-51]。当然、中国にもチンギス・ハーンの歴史を戦略的に利用しようとする野望がある。近隣諸国と複数の領土紛争を抱えている上に、台湾や新疆ウイグル自治区、それに南モンゴルこと内モンゴル自治区などは複雑な民族問題に直面している。中国が「古くから我が国の固有の領土だ」と主張する領域はどれも元朝期に併合されたに過ぎないし、チベット人とウイグル人、それにモンゴル人³⁾を「中華民族の一員」として位置づけようとする政治的な根拠も、モンゴル人が元朝の支配者だった歴史に遡るしかない (写真3)。換言すれば、中国政府が肝煎りで実現しようとする「中華民族の偉大な復興の夢」と日ごとに厳しさを増す民族問題と領土問題を解決する為には、チンギス・ハーンをその子孫のモンゴル人から引き離す必要があ



写真2 中国内モンゴル自治区西部のオルドス高原に立つチンギス・ハーン像（2008年2月，筆者撮影）。



写真3 内モンゴル自治区西部のオルドス市政府庁舎前のチンギス・ハーン像。多民族からなる幕僚たちと共にいるイメージは現代中国の少数民族の存在を意識している（2008年2月，筆者撮影）。

る。モンゴル人からチンギス・ハーンを略奪して、中国人が自由に解釈し、そしてその歴史や文化を「資源」として自由に切り売りできるようにすれば、「中華民族の偉大な夢」も実現可能となる。小論は主として南モンゴルのオルドス高原にあるチンギス・ハーンの祭殿を取り巻く変化を現代史・国際関係史の脈絡の中で追いながら、チンギス・ハーンとモンゴル史の政治資源化の一端とその政治的狙いをよむ。また、その際に中国に生きるモンゴル人たちが困難な状況の中で、自民族の歴史をどのように表象してきたかについても触れる。

2 流転のチンギス・ハーン祭殿

中国が直接その影響力を行使しうるチンギス・ハーン関連の施設は、私の故郷、南モンゴルのオルドス高原に立つ「チンギス・ハーン陵」である（写真4）。私は以前に現地調査の成果を民族誌『チンギス・ハーン祭祀—試みとしての歴史人類学的考察』〔楊2004〕にまとめたことがあり、以下は「チンギス・ハーン陵」が成り立った歴史的経緯である。

「チンギス・ハーン陵」とは中国人からの呼称で、モンゴル人は古くからナイマン・チャガン・オルドと表現してきた（Naiman Chaghan Ordun）。こちらは「八つの白い天幕」や「八つの白い宮帳」との意である（写真5）。後世で「八白宮」と称される施設を舞台に、モンゴル人はチンギス・ハーンの「聖なる息」と逝去後に神聖化された遺品類や軍神ハラ・スウルデ（Qar-a Sülde）などを祭ってきた。祭殿と遺品類を守り、体系化された祭祀活動を維持してきたオルドス・モンゴル人は祭祀者集団（Darqad）である。いうまでもなく、チンギス・ハーン祭祀は地域的儀礼ではなく、ユーラシアの遊牧民社会の



写真4 オルドスに立つチンギス・ハーン陵（1991年5月、筆者撮影）。



写真5 1950年代以前のチンギス・ハーンの祭殿。天幕からなっていた（筆者蔵）。

中で最も政治化された祭典であり、それゆえ、祭祀者のオルドス・モンゴル人もまた政治意識（民族主義）の強い集団である。もともとはモンゴル高原で遊牧していたオルドス・モンゴル人は15世紀頃からシャルムレン（黄河）を渡って高原地帯で越冬するようになり、のちに清朝に帰順してからはしだいに地域集団化して定住化の道を歩んだ。現在約15万人のオルドス・モンゴル人が高原で暮らしている。

そもそもチンギス・ハーン祭は元朝を含むモンゴル帝国の国家大祭であった。その為、祭祀には全モンゴルの有力者の参加、貴族の参列が義務づけられてきた。チンギス・ハーンの祭殿、すなわち八白宮が置かれていたところは、大ハーンの即位の場でもあった。宮帳と共に移動していた軍神ハラ・スウルデは定期的に全モンゴリアを巡回し、祭祀用品を遊牧民から徴取していた。宮帳と軍神ハラ・スウルデを維持してきた祭祀者ダルハト集団には「宰相」（Zayisang）や「將軍」（Jangjun）などの「朝廷の大号」が使用されてきた [楊 2004]。このように、チンギス・ハーンを祭った八白宮は全モンゴルを統合する政治のシンボルだった為に、1911年末にモンゴル高原の貴族らは密かにその移転を計画していた。清朝からの独立を果たした暁には新生国家の象徴にしたかったのである。しかし、八白宮をオルドスからウルガこと今日のウランバートルに移動させる計画はその後、中華民国に阻止されて頓挫してしまった [橋 2011]。

チンギス・ハーンの利用価値に注目したのは中華民国だけではない。日本もアジアへ進出した時に積極的に「義経が大陸に渡ってチンギス・ハーンになった伝説」を打ち出した [Miyawaki-Okada 2006: 123-134]。モンゴル人も日本人の歴史上の英雄がチンギス・ハーンになったとの伝説は荒唐無稽だと分かりながら、新興の大日本帝国主義の力を利用して中国からの独立と民族自決を目指した。1930年代になると、日本と協力して独立運動を展開していたチンギス・ハーンの直系子孫の徳王（テムチュクドンロプ王, Demchugdongrub Wang）も八白宮をオルドスから自らの支配地へ運ぼうと希望していた。八白宮が徳王と日本軍の手に落ちないように、先手を打った中華民国政府は1939年に軍隊を派遣して祭殿を甘肅省の奥地へ移転した。国共内戦で劣勢に立たされた国民政府はその後、更に八白宮を台湾に運ぶ計画だったが、青海省の西寧市まで移動したものの、ついに実現しなかったのである。ちなみに台湾の中華民国政権は現在も毎年、蒙蔵委員会の委員長（大臣）を主催者とするチンギス・ハーン祭を挙行している。

チンギス・ハーン祭殿がオルドスから引き離されていた間、日本軍と満洲国のモンゴル人は協力し合って、1944年に満洲国西部の王爺廟（現ウラーンホト市）で別のチンギス・ハーン廟（写真6）を建立した。モンゴル人と日本人が協同で祭祀活動をおこない、「五族協和」を標榜した [Hyer 2006: 57-73]。共産党の中華人民共和国が成立した後、中国人はチンギス・ハーン廟を「日本帝国主義の侵略のシンボル」だと批判してきた [Charleux 2009]。しかし、2006年に中国の重要文化財に登録されてからは、「モンゴル民族の抵抗の象徴」だと再解釈されるように変わった。モンゴル人が日本の支配に抵抗する為にチ



写真6 満洲国のモンゴル人地域に建つチンギス・ハーン廟。明治神宮外苑の聖徳記念絵画館を模倣した建築であるが、オルドスのチンギス・ハーン陵は更にこの廟のデザインを踏襲している（1999年8月、筆者撮影）。

チンギス・ハーン廟を建立したとの新しい見解が生まれたのである。

一方、八白宮は1954年に青海省からオルドスに帰還した。内モンゴル自治区のモンゴル人の強い要望に共産党政府がしぶしぶ応じた結果である。1939年に国民政府がチンギス・ハーン祭殿を甘肅省へ移動させた際に延安に割拠していた中国共産党も全面的に協力していた。しかし、中華人民共和国建国後は「チンギス・ハーン陵の移転は蒋介石の大漢族主義が暗黒な統治をしていた頃の政策だった」と再解釈した。モンゴル人側には最初からチンギス・ハーン祭殿の移動に対し強い不満がたまっていたが、共産党は国民党を批判することで、そのガス抜きをはかったのである。

3 中国が位置づける「チンギス・ハーン」

漢族の共産主義者たちが中国の支配者となってから、モンゴル人が維持してきたチンギス・ハーン祭祀は大きく改革を迫られた。まず、1956年6月14日、国家民族事務委員会が「今後、中央政府は代表を祭祀に派遣することはない」と自治区政府に伝えてきた。それから、祭祀活動に漢族と女性が参加しないという禁忌も撤廃された〔那日松ほか 2010: 116, 145〕。清朝から中華民国に変わってからも、国民政府の代表が毎年欠かさずにチンギス・ハーン祭祀に参列していた慣例が廃止されたことになる。ただし、厳密にいうと、現在、台湾の台北市で举行されているチンギス・ハーン祭祀には、蒙臧委員会の委員長（漢族）が中華民国政府を代表して参加する制度はまだ残っている。

社会主義中国によるチンギス・ハーンの政治的利用は、中ソイデオロギー対立が激しさを増した1962年にピークに達した。この年はチンギス・ハーン生誕800周年に当たり、モンゴル人民共和国では当初、盛大な記念行事を予定したが、ソ連の圧力で中止に追い



写真7 モンゴル国東部のダダル地域に建つチンギス・ハーン像。この石碑の建立に関わった政治家は暗殺された（1997年9月、筆者撮影）。

こまれた。ソ連は当時、チンギス・ハーンは侵略者にして大封建主、各国人民を虐殺した人物だと解釈していただけでなく、モンゴル人にもロシア人と同じような歴史観を共有するよう強制してきた [Boldbaatar 1999: 237-245]。記念行事を推進していた政治家が暗殺されたこともあり、ソ連と対峙する勇気を持たなかったウランバートルは結局、すべての行事の中止を決定して、静かに800周年を迎えざるを得なかった（写真7）。モンゴル人民共和国を自陣に引きこみたいと前から画策していた北京当局はモスクワとまったく逆の姿勢を打ち出した。中国共産党政府はチンギス・ハーンを記念する盛大な政治活動の実施を発表し、歴史学者たちにも協力を求めた。政府の呼び掛けに応えた韓儒林は「チンギス・ハーンを論ずる」との論文を『歴史研究』に発表してソ連側を驚愕させた [韓 2000: 170-187]。

韓は主張する。最近、一部の歴史家たちはチンギス・ハーンを完全に否定しようとしている。特に覇権主義者らはずっと弱小民族を侮辱し、彼らを他人に使われるべき劣等民族だと軽蔑する。弱小民族の誇りを抹殺し、植民地の奴隷の地位に甘んじさせる為に、その歴史上の傑出した人物を過小評価し、否定している。チンギス・ハーンについても、覇権主義者たちは彼の虐殺と破壊を過度に強調し、ある一地域や一民族の抵抗を持ちだして、彼が歴史上に果たした進歩的な役割については正しい評価を加えていない。このように、韓の論鋒は鋭く、ソ連に激しい批判を浴びせている。

中国がこのように「覇権主義者」に仕掛けてきた「歴史戦」に対し、ソ連の東洋学者たちは「マルクス・レーニン主義から遠ざかる偏向の道を歩んでいる」と反発した [菊池 1964: 23]。中国は歴史学者を動員しただけでなく、「チンギス・ハーン生誕800周年」の記念行事として、1962年6月16日にオルドスにあるチンギス・ハーン祭殿で三万人もの「モンゴルと漢、それに回族の人民」が参集した盛大な祭典をおこなって、モンゴル

人の英雄を声高に称賛してみせた。つづいて6月22日から29日にかけて、フフホト市で「内モンゴル自治区歴史学会」主催の学術討論会が開かれた。中国において、歴史学会も当然、政府の傘下の政治組織である。その学術討論会で出された「チンギス・ハーンに関する正しい評価」は以下の通りである〔那日松ほか 2010: 146-153〕。

1. チンギス・ハーンはモンゴル民族を統一し、政治と経済、それに文化を発展させた。
2. チンギス・ハーンのモンゴル軍が中原に進攻したのも、歴史の必然性で、客観的な発展の結果である。
3. チンギス・ハーンが中央アジアやヨーロッパに遠征した結果、東西の交通が開闊された。一部で虐殺も指摘されているが、全体的には社会の発展に貢献したと評価できよう。

以上のように、「チンギス・ハーンのモンゴル軍が中原に進攻したのも、歴史の必然性で、客観的な発展の結果である」と自己犠牲の精神に満ちた「評価」はどれもソ連の歴史観に対抗する為に出された政治的な見解である。中国人研究者は多言語による第一次資料の駆使が不得意で、その研究も客観的な学術研究の成果ではない。換言すれば、ソ連批判の為のイデオロギーを優先した「チンギス・ハーン論」である。

中国がいう「チンギス・ハーン陵」すなわちモンゴル人の八白宮は1964年に内モンゴル自治区の重点文物に認定された。二年後の1966年に文化大革命が勃発すると、内モンゴル自治区で大規模なモンゴル人ジェノサイドが発動された〔楊海英（編）2009～2017〕。モンゴル人が中国政府と中国人に大量虐殺されていたのと並行して、それまでのチンギス・ハーン論も一変した。「チンギス・ハーンは対外拡張主義の野心家、極端な民族主義者、モンゴルの封建的な王公貴族の利益を代表し、多くの民族を征服し、酷使した」と罵倒された。歴史上のチンギス・ハーンが批判されただけでなく、自治区の指導者ウランフーも「現代のチンギス・ハーン」として肅清された〔楊海英（編）2011; 楊 2014: 247-248〕。まるでソ連の見解を丸写ししたようなチンギス・ハーン論であるが、それでも両者の政治的な対立は解消されなかった。

1966年9月5日、オルドス高原に入植していた中国人たちが八白宮に闖入し、「チンギス・ハーン陵」という扁額を外し、宮殿内の文化財をほぼ例外なく破壊した〔那日松ほか 2010: 469〕。それ以降、八白宮は「反修正主義の倉庫」に改造された。500戸あった祭祀者集団は中国政府と中国人から迫害を受け、解散に追いこまれた。1980年に私が初めて八白宮を訪れた時、宮殿内には「ソ連の侵攻に備えた戦略物資」の塩が山積みになっていたのを覚えている。その後、1981年から少しずつ修復が始まり、1982年には全国重点物に選定された。それ以来、八白宮は中国政府のドル箱になって今日に至る。

八白宮が「チンギス・ハーン陵」との名で中国の重点文物になっても、モンゴル人に対する警戒は緩めていない。政府は八白宮に常時、一個中隊の秘密警察を配備して、モンゴル人の行動に目を光らせている。モンゴル人の幹部や知識人が参拝に訪れると、身

辺から離れずに監視するし、モンゴル人高校生や大学生が集団で参拝するのも禁止されている。2015年7月10日、イギリスや南アフリカなど諸国からの観光客ら20人が八白宮を訪れた際に「テロリスト」として逮捕され、国外追放の処分を受けた [楊 2015]。

4 切り売りされる「モンゴル文化と歴史」

チンギス・ハーン陵だけでなく、内モンゴル自治区全体において、1990年代初期から観光業界で大きな利潤を得ているのは中国人すなわち漢人である (写真8)。北は山西商人、南は浙江省の温州商人など、中国内地から進出してきた人たちがモンゴル人を搾取する構図となっている。観光開発においても、「チンギス・ハーン関連の商品」を独占してきたのは、中国人である (写真9, 写真10)。このような状況に陥った理由は簡単である。モンゴル人がチンギス・ハーン関連の観光商品を販売すると、「民族主義者」だと見なされるのに対し、中国人即ち漢民族は絶対に「反党叛国」しないと信用されているからだ。このような経済状況は更に政治的には自治区の書記も必ず中国人でなければならないという政治的構造と重なって、一種の独特な社会主義流殖民地体制が形成されている [楊 2013b]。モンゴルは19世紀末から中国の殖民地に転落した、との認識をモンゴル高原と南モンゴル (内モンゴル) の知識人や政治家たちは20世紀初頭から文化大革命が発動される直前の1965年まで抱いてきた [楊 2016: 64-69]。「内モンゴルは中国の殖民地である」との見方は現在においても、モンゴル人の政治的地位を分析するのに有効である。



写真8 「草原観光」に訪れた南中国の中国人。モンゴル人の民族衣装を試着するイベントもある (2015年8月, 筆者撮影)。



写真9 中国人が描いたチンギス・ハーン像 (2015年8月, 筆者撮影)。



写真10 中国人が開発した「チンギス・ハーン酒」。モンゴルらしさはない、とモンゴル人に酷評されている (2015年8月, 筆者撮影)。

中国政府と中国人にとって、チンギス・ハーンは終始、扱いにくい存在である。チンギス・ハーンは一方では「ヨーロッパまで遠征した唯一人の中国人」で、大国としての虚栄心を満足してくれる。しかし、過度の礼賛は域内に住むモンゴル人のナショナリズムの高揚につながりかねないので、抑制的な政策を執らざるを得ない。政府がモンゴル人と「チンギス・ハーン陵」との関係を通り過ぎて警戒している中で醸成されたのは、無難な中国人と「民族分裂主義者」になりやすいモンゴル人という構図である。文化大革命中の大量虐殺を経験したモンゴル人は政治的な災難が再び降ってくるのを避けようとして、チンギス・ハーンと関連した観光や活動に距離を置こうとしているのに対し、無難な中国人は積極的に文化資源を独占してきた。いわば、外来の中国人がチンギス・ハーンという文化を資源として用いて、「チンギス・ハーンの子孫」を搾取し、抑圧する植民



写真11 中国人を歓迎するモンゴル人女性の塑像。塑像は表情が乏しく、「死んだモンゴル人が中国人を歓迎させられている」とモンゴル人たちは解釈する（2014年8月、筆者撮影）。

地体制が続いている。

モンゴル人を大量虐殺してきた中国人は「少数民族は純朴」だとか、「少数民族はおとなしい」とかのイメージを意図的に作り上げている。また、「少数民族は歌と踊りが上手（能歌善舞）」で、「少数民族はよく酒を飲む」し、そして「モンゴル人は客好きだ（蒙古人好客）」として自治区にやってきて、文化を消費する（写真11）。ある人類学者の分析によると、中国人は常に一方的な少数民族観を創出してから、自らは永遠に歓迎される存在だと期待する [Bulag 2002: 1-21]。この点はチベット自治区でも同様である。チベットの寺院はほとんど1958年に人民解放軍が侵略した際に破壊されたが、現在、その廃墟と化した寺院に観光客の中国人はロマンを求めてくる。中国人は自らが破壊した寺院を舞台に、チベット人に歌とダンスを強要している [唯色 2009]。他人の故郷に侵略して定住し、他者を「純朴化」してその文化を消費する。やがては人口を逆転させて名実ともに支配者となる。それでも、自らは被支配者に歓迎される存在だと演出するのは、典型的な植民地統治のパターンである [楊 2013b]。

5 復権と沈黙

「チンギス・ハーン生誕850周年」にあたる2012年11月14日から15日にかけて、モンゴル国の首都ウランバートルで「チンギス・ハーンとグローバリゼーション」という大型国際シンポジウムがエルベクドルジ大統領の主催の下で開催された。世界各国から60数名の研究者が招待されたが、ほぼ全員、チンギス・ハーンに関する著作を持つ人びとだった。私も冒頭で触れたイギリスのジョン・マンらと共に、大統領の情熱に満ちた演説に耳を傾けた。一時間に及ぶスピーチの中で、大統領は何回も「大いなる主君チンギス・



写真12 チンギス・ハーン生誕850周年大会で演説する得るエルベクドルジ大統領（2012年11月、筆者撮影）。

ハーン」という古い年代記内の表現を使いながら、「チンギス・ハーンは法律に基づいて治世し、世界に平和をもたらした」と現代の日本や欧米で定着しつつあるチンギス・ハーン論を披露した（写真12）。中央アジア諸国から訪れた、「チンギス・ハーンの直系子孫」を自称する人びとを厚遇し、チンギス・ハーンが誕生したとされる11月14日を「国民の榮譽なる日」と定めた。大統領とモンゴルの国民が想起していたのは、800周年記念行事がソ連によって中止に追いこまれたことと、中国がチンギス・ハーンをモンゴル人から「略奪」して、一方的に「中華民族の英雄」として称賛していることである〔楊2013c: 75-76〕。

対象的だったのは、南隣の中国である。2012年には、チンギス・ハーンと銘打った記念活動は一切禁止された。内モンゴル自治区ではモンゴルについて語る時は「草原」を、「モンゴル文化」は「草原文化」で代表しなければならなかった。かくして、チンギス・ハーンは一年間禁句とされ、その子孫たちもまた沈黙せざるを得なかった。まるで中国とソ連は入れ替わったかのように、往昔の歴史上の人物に接したのである。中国の有名無実の自治区に暮らすモンゴル人は、独立国のモンゴル人よりも幸せだという政治的な風情を演じようとした中国当局のやり方に、モンゴル人たちも服従するしか方法がなかったのである。

注

- 1) 欧米や日本の研究者は「チンギス・ハン」や「チンギス・カン」などと表現することもあるが、本研究では現代モンゴル人の発音に則して、「ハン」を「ハーン」とする。

- 2) 原文は以下の通りである。「听说我们的成吉思汗征服欧洲，是我们最阔气的时代。到了二十五岁，才知道所谓这我们最阔气的时代，其实是蒙古人征服了中国，我们做了奴才。直到今年八月里，因为要查一点故事，翻了三部蒙古史，这才明白蒙古人的征服斡罗思，侵入匈奥还在征服全中国之前。那时的成吉思汗不是我们的汗，倒是俄人被奴才的资格比我们老，应该是他们说‘我们的成吉思汗征服中国，是我们最阔气的时代的」（鲁迅 1934: 111-112）。
- 3) 本稿では少数民族を指す際に、近年顕著になりつつある「……人」を用い、「……族」や「……族群」を採用しない。その為、中国人は専ら漢人を意味し、モンゴル人とチベット人、ウイグル人等はあくまでも「国籍上は中国のモンゴル人、中国籍チベット人・ウイグル人」の立場を取る。楊海英著『ジェノサイドと文化大革命』（2013a: 47）参照。

参考文献

〈日本語文献〉

岡田英弘

1992 『世界史の誕生』東京：筑摩書房。

菊池英夫

1964 「中国歴史学における思想運動と史学理論」『中国研究月報』198: 23-33。

ジョン, マン

2006 『チングス・ハン—その生涯，死，そして復活』東京：東京書籍。

島村一平

2017 「社会主義が／で生み出した英雄・チングス・ハーン」『歴史学研究』959: 36-51。

杉山正明

1992 『大モンゴルの世界』東京：角川書店。

2008 『世界の歴史—大モンゴルの時代』東京：中央公論社。

橘 誠

2011 『ボグド・ハーン政権の研究』東京：風間書房。

浜由樹子

2010 『ユーラシア主義とは何か』横浜：成文社。

フェザーフォード, ジャック

2006 『パックス・モンゴルリカ—チングス・ハンがつくった新世界』星川淳監修，横堀富佐子訳，東京：日本放送出版協会（*Genghis Khan and the Making of the Modern World*. New York: Crown and Three Rivers Press, 2004.）。

楊海英

2004 『チングス・ハーン祭祀—試みとしての歴史人類学的再構成』東京：風響社。

2013a 『ジェノサイドと文化大革命』東京：勉誠出版。

2013b 『殖民地としてのモンゴル』東京：勉誠出版。

2013c 「彙報 〈国際シンポジウム チングス・ハーンとグローバリゼーション〉」『日本モンゴロ学会紀要』43: 75-76。

2014 『中国とモンゴルのはざままで—ウラーンフーの実らなかつた民族自決の夢』東京：岩波書店。

2015 「チングス・ハンは中華的英雄？—奪われた陵墓の数奇な運命」『ニューズウィーク』18

(8月4日号)。

2016 『モンゴル人の民族自決と「対日協力」』福岡：集広舎。

楊海英 (編)

2009~2017 『モンゴル人ジェノサイドに関する基礎資料』(1-9巻) 東京：風響社。

〈中国語文献〉

韓儒林

2000 「論成吉思汗」『穹廬集』石家荘：河北教育出版社。

李振文・那楚格

2002 『千年偉人成吉思汗』鄂爾多斯：鄂爾多斯市成吉思汗研究所。

李振文

2003 『成吉思汗史論集』呼和浩特：内蒙古人民出版社。

魯迅

1934 「隨便翻翻」『且介亭雜文』北京：人民文学出版社。

那日松・王龍勝・蔡永和・菅志立 (編)

2010 『成吉思汗陵 (1949-2006)』海拉爾：内蒙古文化出版社。

唯 色

2009 『鼠年雪獅子吼』台北：台湾允晨文化出版社。

朱耀庭

1991 『成吉思汗伝』北京：農村読物出版社。

〈欧文・モンゴル語〉

Boldbaatar, J.

1999 The Eight-hundredth Anniversary of Chinggis Khan: The Revival and Suppression of Mongolian National Consciousness, In S. Kotkin and B. A. Elleman(eds.) *Mongolia in the Twentieth Century: Landlocked Cosmopolitan*, pp. 237-245. New York: Me. E. Sharpe.

Bulag, Uradyn, E.

2002 *The Mongols at China's Edge, History and the Politics of National Unity*. Lanham: Rowman & Littlefield Publishers.

2010 *Collaborative Nationalism, The Politics of Friendship on China's Mongolian Frontier*. Lanham: Rowman & Littlefield Publishers.

Charleux, Isabelle

2009 Chinggis Khan: Ancestor, Buddha or Shaman? On the use and abuses of the portrait of Chinggis Khan. *Mongolian Studies*. pp. 207-258.

Hyer, Paul

2006 The Chinggis Khan Shrine in Eastern Inner Mongolia. *Mongolian Studies* XXVIII: 57-73.

Miyawaki-Okada, Junko

2006 The Japanese Origin of the Chinggis Khan Legends. *Inner Asia* 8(1): 123-134.

Shimamura, Ippei

2012 *Chingis Khaan Khénii baatar vé?* Ulaanbaatar: Admon.